

犯せる賊徒いかに罰せむ。

驕慢と虚榮と誇大妄想と
身を蝕みて神明の
怒に遂に元凶敗れ――

リンデンの頭にたてる王城の
あるじ逃れて倉皇と
アメロンゲンの偶にすくまる。

國際の約たゞ紙の一片と
呼びし元兇その約に
よりて今生く恥を知らずや。

エルダンの堅城の前十萬の
かばねを積みし虎狼の子
運命のきわみ何の涙ぞ。

聯邦の未來の霸王、全獨の
六千萬の民統べむ
位失ふ悲憤の涙。

滔天の惡を極めし應報は
未だ到らず紅涙を
權失へる故に灑ける。

反間を四海に放ち列邦の
好破りて漁父の利を
あさりし報、亡命の賊。

人間の作るあらゆる惡名に
呼ばんも遂に飽きたらじ
千萬の屍かれに築かる。

皇天の正義の秤千萬の

屍を積みし元兇の
滔天の罪いかに量らむ。

夜深けて天の萬軍燦爛と
下界見おろす光の目
魂ひれふして今何を曰ふ。

★一千九百十四年九月十三日東戦場の獨逸軍隊に下せし勅命

西園寺侯に密する歌

洛東の田中の郷に閑雲と
野鶴を友の一高士
人生七十夢すでに足る。

權か名か富か雲烟目を過ぐる
一場の夢——大空の

碧の鏡高く澄み行く。

想ひやる波爛の起伏五十年
銀鞍白馬風流の
公子いにしへセイヌの岸に。

一代の俊才若く光明を
花を薫りを藝術を
樂を斯文を讀せざらめや。

嗚呼セイヌ自由平等友愛の
大義かどやくパリの郷
其水其空誰れか忘れむ。

月卿と雲客の名を世々にせし
公子あらたの洗禮を
受けて萬里の波のりかへす。

如何にせん東海の空猶昏く
春寒うして爛漫の
百花の粧見んよしも無し。

〔東洋の自由〕の光おほはれて
才を抱きて懊惱の
姿を見しも時世の非運。

幽蘭の薫り空しく溪谷に
閉さるゝ時繁りあふ
荆棘途を塞ぐ幾重ぞ。

南海の兆民はたまた時を得ず
一代の才いたづらに
奇行に隠れ陋巷に逝く。

青春の夢いまいづれ廟堂に

黄金の印帯ぶれども
時に利あらず脾肉の嘆。

浩蕩の波に白鷗没しさる
跡を學びて一孤舟
五湖の烟波に嘯くもよし。

春秋の遷りいくたび時流れ
勢替り片鱗の
閃き時に雲より洩るゝ。

後進に途を開きて閑窓に
薫ずるかをり洛東の
秋は深け行く故山の姿。

何事ぞ歐の中原一驕兒
天を恐れず命知らず

日月暗し無謀のいくさ。

ルビコンを渡る英雄いにしへの
跡に比へじ驕慢と
妄想修羅のをたけびを産む。

全歐の關山ゆらぎ千萬の
かばねを積みて海洋の
波湫々の聲また咽ぶ。

おほいなる戦亂五年、ボスホラス
ダーダネルスの海峡に
秋凋落を告ぐる一葉。

程もなく霹靂ゆりし大平野
寂寞としてゼルマンの
使者の一群うなだるゝ見よ。

時到り天定りて人に勝ち
狂へる虎狼元兇の
破滅に曙光紅の色。

百年の經綸斯くて基おく
エルサイユ宮萬邦の
使ひとしく星と集る。

東海の扶桑の郷の名に於て
星と集る列強の
欽差の中に誰か耀く。

南陽の草廬はむかし東海の
望を負へる一臥龍
起たしめずして誰を名ざさむ。

目を擧げて四海いづくに英雄の

共に語るを求むべき
セイヌの岸に猶故人あり。

大局の經綸、しらす誰れが手ぞ
かれに大英の大宰相
かれに北米無冠の君主。

たゞざるや、嗚呼西園寺、王臣の
蹇々「逸を求めんや
残軀をいたせ匪躬の節に。

何事ぞ期待空しく鐵輪の
波切りすゝむ海上の
堅城の中君の影見す。

北米のおほいなる影三千里
大西洋の汐けりて

パリに向ふと飛電のたより。

今更に何にためらふ——風雲の
機は忽として彗星の
一たび去りて歸らざるごと。

閑眠はすでに足るべし、時は呼び
潮は招く、天洋に
星槎とくく、跡を追はずや。

閑窓の秋水の夢さむる時
廟堂の春風の樂ひよく時
高士の節に二つあらむや。

思はずやハルビンの秋、風寒く
銃丸とびて、元勳の
血は白霜を染めしにしへ。

邦國に節をいたして朔北に
身を亡ぼし、壯烈の
跡千秋に垂れて朽ちせず。
前鑑のおほいなる跡今更に
たゞに史上の名とせむや
死生は一途、邦に捧げむ。

皇天の恩寵あつく身にたれて
偉なる使命に盡し得て
高士の懐は涼しかるべき。

五十年維新のあとは偉なりしも
更に偉なるは後に待つ、
誰れか風雲の機を捕ふ。

東西一つにまじる潮流の

激するところ、陋習の
古きになじむ邦は亡びむ。

大東の邦の運命吉か否か
千載の決よるところ

高士いかでか起たてやまむや。

鈞天の樂は響かむ、一代の
巨星集まるヴェルサイユ
千里春風花ひらくとき。

起たざるやあゝ西園寺、東海の
邦の使命のよるところ
世界思潮は日に湧きかへる。

*
*
*
*
*

光榮の佛蘭西

日東の空より遙か雙の手を
 舉げてフランス光榮の
 極みの勝を得しを讃ぜむ。

傾けよ葡萄の美酒の萬石の
 生ける喜生ける詩歌、
 美なるフランス遂に勝ちたり。

想ひ見るバリ滿城の大歡喜
 人は狂ひて舞ひ踊り
 勝てりと呼ばむ空どよむ迄。

想ひ見るブルバールの人の波
 樂土は此地此時と

凱歌を揚げし其宵の興。

あゝセイヌ流照して瑞雲の
 幾朶其日の空彩ふ
 雙頬の紅、人若やがむ。

あゝセイヌ其水北に海峽の
 潮に入りて「ゼルマン」の
 ライン」の水に逢ひて何言ふ。

あゝセイヌ空は暮雲の愁より
 泣きしは昨日江上の
 歡呼の雷に答へどよまむ。

チュウレリイ、シャンゼリゼイの逍遙の
 羅綺今時に驕るべく
 樓臺參差樂波と湧かむ。

昨日まで五年にわたる暗黒の
愁と恐、寂寞の
すみか、再び樂園の影。

昨日迄長距離砲の霹靂に
畏怖の空氣のみなぎりし
バリ今ゆらぐ祝砲の聲。

昨日迄砂囊に壘に百方に
防盡くせし大伽藍
美の宮殿はいや照りまさる。

昨日迄轟雷叫び「滅亡」を
降らしし大都今にして
また不夜城の輝を見る。

ロシギョール愁に酔ひて春風に

泣きしブウロギ今日にして
霜降る空も花咲くに似む。

ブウロギの園の池のへ鴛鴦の
生ける錦繡いくむれの
姿平和を今ぞ彩へる。

ループルの美の殿堂のおほいなる
扉ふたたび開かれて
色と光と彩と漲る。

鐘樓の上より高く祝福の
叫を愛を讃頌を
セイヌ河上の塔とどろかせ。

マドレイヌ、サンゼネビイブ、シュルピイス
ノートルダムの莊嚴の

鐘一齊にホザンナ歌へ。

エトアール凱旋門の頂に
エルダン、マルヌ、エーヌより
歸る勇武の旗翻せ。

光榮の極みの勝に元帥の
若やぐおもて、フランスの
偉なる蘇生の標象を見よ。

紅の粧都の千萬の

鏡中の春久しかれ、
毒の兇獨斃れて起たず。

歐洲の文化の光傳燈の
ほまれフランス赫耀と
炎朗いよよ空を射よかし。

光榮のギリイス偉なるローマより
華美のイタリイ引き續き
傳へ來りしラテンの精華。

五十年むかしセダンに又パリに
白旗立てし國の耻
今こそ雪けラテンの意氣に。

コンコルド其一偶に五十年
黒衣纏ひしアルサスと
ロレーンの像と今よみがへる。

其黒き裏衣を脱ぎて平等と
愛と自由の標象の
三色の旗今日こそ纏へ。

永かりし無念の標をかきのけて

月桂飾れ花飾れ、
鹵獲の砲車ひれふす前に。

滔天の罪を重ねし兇惡の
國を懲せと星の如
人は集るヴェルサイユ宮。

ヴェルサイユ其玉殿に建業の
式を挙げたる敵の國
その崩壞はこゝよりぞ今。

飽く迄も懲らさざらめや天人の
ひとしく怒る兇暴の
虎狼無慚の元兇のむれ。

檻牢に入りじ虎狼の爪牙みな
断たてやまむや全歐の

禍永く根ざししところ。

元兇を飽くまで懲し公道の
光かゝけよ東西
瀆武を學ぶ邦の戒め。

チュートンの領の要塞ことごとく
赤土と化さば安からむ、
誰かラインの岸と限れる。

フランスに課すべく毒の宰相の
四年の前に日ひし聞け、
應報まさに毒懲す時。

鑑みよ東亞のむかし吳と越の
興亡の跡おほいなる
禍根より断たてやまむや。

ヂャングリークいにしへ生みしフランスの
邦英靈の憑るところ
萬古晴天霹靂飛ばむ。

「恐るべき年」を嘆ぜし大詩人

幽淵の靈めざめなば

其歌いかに此日此年。

* ユーゴー

わが歌は斯く——さはれ見る關山の

覇國の興りまた滅び、

乾坤永し、一局の棋や。

天上の星の世界に身を移し

想像の目に眺め見る

大局遂に螻蛄の郷。

光榮をやがては神に皆歸せむ。

塹壕のあと白骨の
かたへ夜半の星仰ぐ時。

大能をやがては神に皆歸せむ、

「不可知」の呼吸一瞬に

天造るべし地崩すべし。

アルペン郷土のスケッチ

晚鴉の群を吐きさりて

夕に消え行くライヘン・シュタイン

「たんね」の森を貫きて

走る溪流音まさる。

あゝ黯然として思にこもる

天外の嶺、巨大の姿、

歡樂極り哀情多き

人界のよそにたちばなれ、
雲に纏はれ星に照され、
夜な／＼銀漢のしづくを浴びて
却灰の外に消残る
巨靈今さら何のいたみぞ。

雲を吐きては月に送り
月を吐きては流に送る
峻嶺こゝに何をか待てる、
永く潜めてふところに
はぐくむ思空却の
曉高く飛ばしめて
あらたに來る乾坤の
若き姿を歌はんとすや。

○
夕日さめゆくアベルの湖上
さよなみしづまり風收まり

暗にまぎれてさびしきは
ひそかに暮煙の外にさまよふ。

アベルの湖上白雲泛ぶ
依々たる残月五更の曉
露は長空を清く洗ひて
旅人の夢はまださめやらず。

○
白馬をかりて緑野をわたる
たそや天地の有情の春に、
エンスの流水深し
アルペンの嶺雪白し。

○
麓の大野一面に
ちさき光の金盞花、
仰けば千載不盡の雪を
のする秀麗のアルペンの嶺、

花いたづらに小ならず
嶺いたづらに高からず。

○ 一陣また一陣

雲は迷ふサン・ゴタールの險、
曉くらく大雨烟る。

山靈われを憐みて

此奇を示すや、あらはし飛びて

靈の如くに舞ふあなた、

千仞のきりぎりし霧にかくれ

天半とぎれの大瀑かゝる。

○

陰雲忽ち湖面にわきて

狂うて嶺に舞ひのぼり

飛鳥の翼たゆくして

あらしに吹かれたぢろくか、

殘照西に死するが如く

惨憺の色かすかにも
波をてらして舟さびし、
漁人はいづくに今向ふ。

○

観すれば萬象ことごとくしづか、

漣漪織り成すレーマンの

湖上正しく帆ははしる、

烟に淡きアルペンの嶺

萬古の雪をいたゞきて

連綿遠く湖上にのぞみ

限るかあらしの吹きくる路を。

レーマンの湖上一輪満ちぬ、

散らすは金波銀波の花、

風は今遠くアルペンの

夜半の宿に歸りしや、

なごりかすかの吐息のみ

汀に残る舟べりに。

○
夜半にかすけき一抹は
チユウラの嶺か月光に
佇み立てば露涼し、
夜半に人はまだ寝ねす
つかれし帆を巻き舟こぎかへす、――
雲なし風なし北斗高し。

○
ニオンの汀、残照に
白雪嶺の紫を見よ
レイマンの水風吹きて
さよなみ織るや幾萬重。
ほどなく夕日あと消えて
一輪満ちし銀盤の
姿故山に見しがまゝ――
あゝわが旅もまた長し。

○
陰雲惨として冰河にかゝる、
空切いづれの時までか
山靈神祕をひそむるや、
かなた虚空をつんざくは
エツターホーシ一萬尺、
青苔あつき巉巖の
罅隙幾多の瀑なして
下界戀ひつゝ落ち來る。

アイゲル、メンク、ユングフラウ、
三峯竝びて天をつんざき
極暑八月嶺皆白く
時に遠雷の音なして
なだれはけしきアバランチ、
さながら大瀑落ち來る姿
或は天上魔軍の敗れ

亂れて下界にふりくる姿。

岡法學士の米國遊學を送る

横濱の埠頭はなれてひんがしに
火輪波切る三千里

自由の邦にますらをは行く。
陋習の久しきいまだ世に絶えず

「時」にまかしてしばらくは
自由の郷に術琢かむか。

「神」祖國「人道」の三つ夜に日に
忘れそ健兒塵の世の

濁浪高く空拍つべきを。

「待つ」を知れ「聖」のをしへを心せよ
奴隸の土下座やみてより
わが國未だ百年ならず。

三千里太平洋の波廣く

日いづるごとに思ひでよ

大八洲國父母の邦。

東西高き嶺より大空の

澄めるひとつの月を見よ

「敬天愛人」道こゝに盡く。

(大正七年一月廿六日寺内内閣の時)

青春の意氣(赤門學生に與ふ)

言論と思想の自由、光明の

流あまねく布くところ

魍魎魍魎の逃げ散るを見よ。

その夕、光焰爛とかゞやきて

デモクラシイの聲あぐる

青春の意氣空も焼くべし。

その夕空に星照り、地に若き
「未來の望」幾千の
聲一齊に自由の凱歌。

東方の眠久しき邦の子ら
今燦爛の新たなる
光明に覺む、嬉しからずや。

曲學と阿權と、微と奸佞と
力あはして塞ぎたる
世界思潮の波ほとばしる。

空涵す世界思潮に身をのせて
示威の運動今見るか
至高學府の青年の意氣。

光明にさめし未來の國士なる
幾千のむれ義に勇み
自由のために博士を衛る。

あら嬉し閩族毒を吸ふ處
毒の獨國倒れたる
此年見たり青年の意氣。

世は移り時は過ぎ行く、いつ迄か
意氣の青年閩族の
奴隸となりて身を狭むべき。

盛なり青年の意氣、此邦の
望みなんぢの雙の肩
仰げば旭あさひ口くち十丈高し。

閩族の垣と呼ばれし不祥の名

今こそ灑け、赤門の
健兒の意氣を心より歌ふ。

權勢の前に土下座を強ひられし
時を隔つる五十年
奴隸の夢は永かりしかな。

『民は本』千載不磨のおほいなる
眞理なにとて昨日まで
なほ訝れる者の残りし。

權勢の前に久しく閉ぢられし
扉ひらけて光明は
十方照す、嬉しからずや。

大空にかゝる七の彩よりも
いみじ、地上の青春の

新たな叫び——世は改る。(一九一八・十一月)

ベルジアム

嗚呼レオニダス三百の
寡兵ひきわて百萬の
ベルシヤの軍に手向ひし
テルモビリイも物ならじ。
英武義侠のアルペール
寶劍鞘を走るとき
砲火ひとしく空に燃え
リイジナミユルしばらくは
怒潮と溢れ大山の
寄するが如きチュウトンの
無道の兵を防ぎしよ。
衆寡敵せず國破れ

老幼男女よもに散り
 彈丸黒子一塊の
 土地をとゞめし無念のうらみ。
 五年のあした光明の
 曙さめてよみがへる
 邦、靈鳥のフエニクス
 死灰の外に新たなる
 姿現じて全歐の歡呼の中に翔けり舞ふ。

(一九一八・十一月)

オウストリヤの運命

神聖羅馬帝國の
 源流遠く史にのぼる
 光榮のはてダニューブの
 水冷かに風寒み

殘月の影青白く
 カールンベルグの頂に
 死せるが如く今やかゝらむ。

犬牙互に錯綜の
 あと見る如く民族の
 けじめあまりに多くして
 魔女の鼎を見る如く
 混擾と紛亂と鬭争と陰謀と
 想像の限り極めたる
 禍深き邦家の姿。

先帝の齡八十五
 九五の寶位王冠の
 重きは苦惱、一代の
 跡ことごとく憂のみ、
 はてはボスニヤ一偶の

空一彈のひびきより、
世界を包む火焰ののろひ。

ハプスブルグの光榮の

返ると見しも秋の夢、

大亂五年土崩の姿

虎狼を伴の運命を

何の言葉に悲まむ

あゝ一代の——一國の

無慚の犠牲明日はた如何に。(一九一八・十一月)

弔 芳 魂

(鳥村抱月を慕ひて自殺せ
る松井須磨子をいたむ)

陰雲凝りて寒光しづむ

東北の天地雪に埋れて

ゆふべ傷心のおとづれを聞く。

嗚呼須磨の浦

波や凍らむ、

千鳥や鳴かむ、

松や咽ばむ。

生きては褒貶あらしと騒ぎ、

逝きては幽明霧と隔たる、

一代の善才錦繡の粧、

孔雀のほこり珠玉のひらめき、

海棠の榮牡丹の富貴、

花か紅に紫に生ける文章生ける詩歌、

風月いくたび舞殿の袂

かへせば湧きくる無韻の哀思。

一代の視聽かくして集め、

矯名あまねく梨園を壓して

青春の血を涌かしめし

それも夢なり——雲こぼる。

「批評」よ、しばらく目を閉ぢよ、
無底の幽淵花魂を吸ひて
永遠不可知の神祕の前に
うつむく姿——紅血を
染むるが如き一條の恨も長き末にかゝれる。

おほいなるかな「死」の力、
海の内また海の外

おほいなる事繁き時、

「天下の耳目」二齊に
競ひて魂のあと弔ひて
埋め盡せし幾段の欄ぞ。

おほいなる年、大正の
八年——西曆數へきて

一千九百十九年、
歐亞の大地震はしめ、
一千万の屍を築き、
三千億の財を盡し、
ホーヘンツォレン、ロマノフと
ハプスブルグの権能を
あらしに亂るる枯葉の如く
大地のおもより拂ひ去りし
大戦亂のあとひそめ、
更に新たにおほいなる
建設の基おかるべき年。

百の民族精を抜き
粹を選びて送り來し
一代の巨星光きほひて
滿城の春霞むべきヴェルサイユ城充たす時。

威容あらたに整ひし彼れ大英の大宰相、
北米無冠の王と共に、
更に翟鑠のクレマンソウ
三寸の舌風雲を猶ほ捲き返す老雄と
共に世界の經綸の基おくべく語る時、
一言一句千萬の民の運命制すべき
飛電のたより紛として東海の空によする時。

明鏡寶劍珠玉の理想

抱きて春秋二千年、
東亞のすみに影潜め
しらすくゝに天職のいたるを待てる此邦の
英靈長き眠を破り、
黎明の光あらたに仰ぎ、
奴隸の束縛たち切りて
世界思潮のおほいなる流に投じ進む時。
バンドウラの匣ならず

傾け来る光明と希望の寶拾ふべく
樂觀の目の見張る時。
更に懷疑の目より見て
晴かあらしか霧か雨か、
七彩いろどる虹霓か、
轟雷孕む陰雲か、
邦の運命皇天の愛か、
いづれと思ひ悩む時。

そのおほいなる年新た
屠蘇の芳醞紅潮の頬にある時忽として
曉寒く碎けし香魂、
環珮むなしく歸りきて
そのあけぼのの鐘や聞く
關山の雪梅を封じて
恨も深き人の世の
哀れ弔ふとや一代の

視聽ひとしく渺たりし女優のあとに曳かるるよ。
 三萬の鐵騎朔北に夜半のねむり成らぬ時、
 南溟の月冷かに猶艤艦を照す時、
 廟堂の中平民の宰相勉めて治をはかり
 飢と寒は邦の本の民に無かれと勵む時、
 さはれ瑞穂の邦にして黄金の波滿ちながら
 糧は乏しと訴ふる聲のますます上る時、
 時世の運をさかさまに刑餘の奸邪回る時、
 慢か忌憚か冷淡か輿論こゝには黙す時、
 微と陳腐と蒙昧と過去の亡靈一堂に
 頭集めて九泉に秦の始皇を起すべく
 東亞の民の一面の統一の法計る時、
 それとは見へで天上に嘯きひかる月球の
 力に起る干滿の潮の流寄る如く
 世は紛として事繁くおほいなる業群がりて
 東西ひとしく目を見張り耳飛ばすべき今の時。

おほいなるかな死の力
 くしくも偉なり情の聲
 廣き八州しまの中にして
 須磨の浦波咽べりの
 たよりひゞかぬ郷も無し。
 一雙の明眸秋の水
 恨湛へしいやはての
 寫影——はたまた慇懃の
 思をこめし文を見よ、
 鉛華粧ひて明鏡に
 とめしいまはの身だしなみ、
 粧はぬものは愛の聲。

『海より深き恵ある
 師に背きてもすがりきし
 人さきだててながらへじ、』

塚を共に」と綿々の
 願を残す筆のあと。
 *其師に永く譽あれ、
 藝園とこしへに香を吐きて
 名花にははむ有象の歌樂、
 その本深く培へる
 辛酸のあと神は知る。
 梨園の弟子散じ行き
 なかば開きし花ちれど、
 恩にそむくを猶懷ふ
 情藍田の珠に似つ、
 黄沙白草朔漠の
 月に老將の歌ふ如く、
 なほ萬斛の熱涙を
 無形の絃にそぐべく
 斯文の庭に逍遙の
 勳業長し四十年、

天爵高く光照り、
 青史不朽の名を載せむ。

〔批評〕しばらく目を閉ぢよ、

情海の波瀾底知らず、

(その人ならで何ものか潜りてあとを窺めしや)

幽を穿ちて微をわかち

理性するどき一代の

才人長く學を棄て、

目を極れば風塵暗き

誹謗のあらし耳にして

師を棄て名を棄て恩愛の

妻子を棄て、一塊の

むくろゆだねし『戀の宮』。

二十四番の春の花

盛りはよしや夢といへ、

一壺の天地甘きを湛へ、

月明梨園花落つる時、

秋風旅館雁渡る時、
愛と藝術渴仰の
的と眺めて過ぎ來しや。

五年にわたり世をゆりし
大戦亂の終れるに
さきだつ日數六*ににして、
病の床に一瞥の
最後の別告けも得ず、
毀譽の重きを負へるまゝ
忽然として愛人の
逝けるその夜半斷腸の
叫び何等の無韻の詩、
別れし鴻、離れし鸞、
悲風怨雨の吟にして、
石を打つべく手を舉げし
〔道學〕しばし目を閉ぢぬ。

ヘスチングスの戰場に
王ハロードのなきがらを
探りあてしは何人か、
愛はすべての謎を解き、
愛はあらゆる罪詫びむ。

女羅纏はりし百尺の
松倒るとき秋は盡く、
千鳥に更くる須磨の浦
あらしもたよる術なけむ、
きのふは蘭麝君のため、
脂粉これより誰粧ふ、
今悽慘の目に寫る
世は荒涼の大沙漠
目を閉ぢ暗にきける時
遠くかすけく魂招く。

世の偽に汚されし
 『死なば共に』のかねごとを
 果さでやまじ情に生き
 情にたほれてやみぬべき。
 舞殿の夜半霜寒く
 愁に曇る電燈の
 光り陰火の青き見む、
 幽蘭かくて碎かれて
 香を曉の風に寄す。
 世間の道_{ミチ}を破りたる罪か、斷腸夜半の叫
 愛の理想に殉したる恵か、情海不滅の名
 報か恵か誰か斷ぜむ。
 あゝあゝ World-wearied flesh
 絆を解きて寒光の
 すぎきあしたの風に飛ぶ
 芳魂しらすいづくにか去る。

嗚呼明眸と豊頬と娥眉と碎けて地にまみれ、
 灰と残りて萬有の巨大の胸に歸るとき、
 かれも穂め行く虹霓の絶え絶えの橋空に見る。

「信」の光は薄うして
 「否定」の眼は冷かに
 三尺の墓笑ふとも、
 起ちて夜半に光芒の
 震ふ北斗を仰ぐとき、
 人籟やみて咆哮の
 あらしに翔くる靈の聲
 膝つく魂に何を説く。
 しばらく堅き幻影の
 壁貫きて浮びきて
 幽淵の影ほのみする
 おほいなるかな「死」の力。

世は黄金の力満ち、
 人は虚榮の夢深く、
 虚偽と姑息と形式と
 阿諛と輕浮と顛倒と
 寄りて赤裸の純眞の
 相を光をかくす時、
 其まのあたり戦を
 挑むが如き心血の
 凝り成す誠こゝに見よ。
 「脆し」女性の名なりせば
 「強し」「いみじ」は其異名、
 裙釵いまさら顧みて
 天の微妙の寵知らむ。
 金鐵碎く堅剛の
 情の威力に名を救ひ、
 罪を償ひ、さきだちし
 情人の名をまた救ふ、

おほいなるかな「死」の力。
 今逝く魂のあとたどり
 もの一切の疑を
 拂ひて幽冥測りなき
 神祕の門にたちとまり
 身をひれふしてへりくだる
 涙と共に祈るとき、
 時間空間一切を
 貫き渡る「大靈」の
 聖のいぶきに扇がれむ。

(一九一九・一月
 中央公論所載)

- * 坪内逍遙先生
- * * * ベトラカの句「愛人の胸」を意味す
- * * * * 彼女の逝けるは一九一八年十一月五日也
- * * * * 『ロメオとジュリエット』の中の名句
- * * * * 『全能のいぶきわれに知を授く』『ヨブ紀』
 中の名句

はしがき

南歐の詩人が東亞飛行の壯舉を愈決定したと聞いた大正八年の秋本篇の大體の構想がとある一夜（九月十八日）に出来上つた。聯想の翼の擴がるまま其後改竄もし補足もしてともかくも今公けにする形と成つた。首尾一貫の一長詩の積りではあるが之を構成する三十六章の各々またそれ／＼獨立の一篇として讀まれるも勿論差支はない。題名は天馬ヘカサスの翼虚空を劈く其道を飛び來る南歐の賓客を迎ふる意をほのめかしたのである。

一千九百二十年三月最後の校正を了へ

著者

序 詩

月桂の緑の冠
寶劍の光を添ふる
一代の詩神の寵兒、
天來の想に驅られて
人工の翼をのばし、
九天に羽敲き
白雲に駕し、
烟波夢むる地中海、
中央亞細亞の山河の固、
五天搖曳の暮の雲、
更に洞庭瀟湘のほとり
黄海の波、韓山の月
千山萬水下に見て
南歐遠く三千里、

率ゐる八機一齊に
東亞縹渺の空に飛ぶか。

ただ一氣、靈妙の大氣の海、

人間の目にふれずして

人間の世をおほひなす

無邊無限の空の海、

しづまりては

深淵の水の如く、幼兒の眠の如く、

あらびては

英雄の狂の如く、蒼溟の怒濤の如く、

渺々として鳥飛ぶにまかせ、

浩々として雲行くを送り、

下界の山川草木國土其底につらね、

有生無生森羅萬象其底にやどす、

空の明鏡、空の大海、空の眩惑、空の神變。

人間いくたび飛鳥をうらやみ、

高く憧憬の眼をかへして、

あるひは金色染めなす雲に

天使天軍の飛翔を思ひ、

あるひは長汀白汀のほとり、

仙女霓裳の舞を夢みし

その幻境もいまは實、

世界にあれし霹靂の狂の中に

心靈の巧と思はぐくみし

空をとぶ舟翔くる羽、

かれ流星を碧落に逐ひ

これ輕燕に虚空にともなふ。

聞かずやアングロサクソンの

誇り、大西洋上を

一氣にこせしアルコック、

(先にホーカア九俣の功を一養に缺くも憂し)

つゞいて百丈のデリジブル
 巨大のR三十四
 悠々として雲をわけ
 潮を眺め天漢の
 連り上に新なる
 大陸のはしおりたてる
 勇士スコット大英の
 獅子王の勇止みしやと
 世界の面に事問ふよ。
 シエークスピアの生れし故郷
 ニートン、ダーウイン思索の邦士
 領を四海に及ぼせる
 大英の子のわざ見よと
 その民一齊に眉揚ぐる。
 太平洋はいまだしか、
 鯨魚銀濤——幻想の

翼自由に飛ぶところ、
 茫々として幾千里、
 新大陸の日の入るほとり
 金門峽を飛びたちて
 天地一白月明の
 光に翔くる者なきや、
 南洋の暖潮北にはせ
 北洋の寒流南に下り
 陰陽冷熱一に合ひて
 大東洋の雲蒸すほとり、
 大鵬虚空に舞ふごとく
 浩氣を凌ぐものなきや。
 知らずや南歐ラテンの精華
 光彩あらたに他方にほふ
 むかし幻影のたちこめし
 東方不思議の國にあこがれ、

風煙高く鳥飛ぶあとに
 黄漠低く日出づる方に
 來りしポーロ生みし郷。
 其のあと更に憧憬の心をそより
 金色のひらめく姿照し見て、
 潮に洗ふ落日の光を慕ひ、
 渺々の神祕の海に乗り出でし
 金剛の意志コロムバス、クリストファを生みし郷。
 美なる伊太利——
 一度は世界の覇王、
 二たびは心靈の覇王、
 更に三たびは美の覇王、
 天の恩寵幾たびか巨大の靈を生みし邦。
 千載の光輝照りわたるラテンの精華衰へず、
 新たに詩美の幻影に打たれてたてる藝園の
 奇才今更生ける詩となりてはるかに三千里
 東亞の空に飛び來るや。

「オーリエント、オーリエント、オーリエント、
 名工レニの筆に見るオーロラ花を散らす郷、
 光はじめて出づる郷、
 紅寶石の郷、碧玉の郷、
 蒼溟の底純潔の光眞珠の生るゝ郷、
 黄金の屋の光る郷、
 サフランの花にほふ郷、
 石楠の香の溪流に引かれて遠く匂ふ郷、
 百蠻のあなた長城の雲に入る郷、
 十二帝陵荒れはてし廢墟に残る奇怪の巨像
 夜半に目をあげ天上のきらめく星と語る郷、
 神祕の文字上より下に奇怪のペンに書かるゝ郷」
 斯く西歐のファンタジイ
 忽必烈汗の朝廷に
 ヴェニス公子入りし後
 わが東洋を夢みしや。

オーリエント、オーリエント、オーリエント、
 今なほ遠く縹渺の神祕の雲にとざされて
 残るか——この珊瑚礁
 千仞の底玄妙の
 しけみ花咲き藻開き
 おほいなる鱒落日の
 光透き来る波の下、
 黄金碧玉珊瑚の色、
 ゆらぐ潮をわくる影
 上を帆ばしる船人の眼に寫らぬ跡に似て、
 東亞の玄祕今に尙
 西の想像の目に見えじ。

東の空のものがたり、
 學者を坑にし書を焼ける
 秦の世避けし桃の原
 武陵のよさしとざゝれて

千萬の花紅の霞にこもる春の榮
 その一片のをとづれをかすかに谷の外に洩らす
 譬に似たり——西東
 文明の潮行き通ふあと繁けれど底の波
 未だ親しく交はらず。

オクシデント又オーリエント、
 蒼海の上漫々の波浪みだれて
 行き通ふみどりの流黒き潮、
 熱き汐また寒き汐、
 其水よせて一片のたより空しき瓶の中
 知らず知られぬ岸による
 跡見る如く民俗の
 精華かすかに縹渺の
 雲を隔て、洩れ來しか。

オクシデント又オーリエント、

萬花の春のあけぼの、
 詩美の國より侵し入り、
 イサス、アルベラ轟雷の
 あらびに續き遠く遠く
 イングス、オクザス流にたちて
 馬に水飼ふ胸甲の
 ひらめき照らす熱帯の
 炎日遂に大軍を
 西へ返ししあとふりぬ。

脂粉三千バピロンの
 錦繡の帳かきわけつ、
 時に妖女の聲聞きて
 パーセボリスの劫火擧げ、
 時に詩聖を陣營の
 燈下に讀みし年若き
 大王の威は夢なれど、

オリインボスの十二神

高き幻名工の
 魂にやどりし名残の香、
 吹きて傳へて金銅の
 毘廬舍那の影にほひしか。

オクシデント又オリエント、

二千餘年の跡とへば

かなたカルタゴ海王の榮華のはての國の亡び、

羅馬七丘赫々の力と富と驕慢と

別に禍亂の恐るべき妖魔を内にはぐくめる

時、こなたには詩美の華――

哀蟬の曲、秋風の歌、

萬乗の君一代の文化の流導きつ、

佳人を傷み歡樂の

はかなき跡に仙の道

求めてたてし承露盤

金莖高く雲に入る、
 それはた一時手を舉げて
 十萬の鐵騎大漠の外に進めば
 妖氛の晴れ行くきわみ逐はれ行く
 蠻族次第に西にはせ、
 侵略の波、移住の波、
 あふれて春秋四百年、
 はては金殿玉樓の
 羅馬の都炎々の焔にやけて
 紫の衣纏へる富貴の子
 先に異邦に臨みたる
 あとを返せし奴隸の身――
 其の慘劇も跡古りぬ。
 オクシデントはたオーリエント、
 隔て、遂に離れ得ず、
 東の波瀾西へと動き

西の雲烟東になびき、
 大化の氣運しきみちて
 彼と此とを包む時
 人類遂に一つの歴史、
 落花の一片雲より落ちて
 幽禽時にしづくを仰ぐ
 谷間の水に落つる後、
 千波萬波の空ひたす
 大海原に入る如く
 無形の金瑣玉帯は
 同じ一塊の地球をめぐる。
 オクシデントまたオーリエント、
 或は西の十字軍
 夕日をかへす劍戟の
 光につれて文明の
 華を次第に移し植ゑ、

或は鐵騎百萬の
蹄青草のあとたちし
モンゴル、タータル、オットマン
威を大陸の外に布く、
あとを史上に見返れば
運命の潮いりまじる
波瀾のあらびうづまくよ。

オクシデント又オリーリエント、
やがて半島イペリヤの
岸より遠く東洋に
サンタマリアの禮拜の
道を傳へし法の群、
點ぜし熱火ひろごれば、
遂に犠牲の幾萬を
焼きし火刑の大紅焰。
中に扶桑の東北

脾肉を嘆く老雄の使一群、
金華松島傍の
月島の沖こぎ出でて
わけし太平大西の
茫々の波幾萬里、
幻影幻境白雲の
うかぶにつれて湧き來しか。
三春の花燃えたちし
盛はすでにうつれども、
法王殿のあけの勤行
サンピイトロの夕の鐘聲、
神祕の影に眺め入りて
そゞろに湧きし渴仰の信の姿は
合掌の使フイリツプ、フランソア
支倉の畫像今に残れり。
オクシデントまたオリーリエント、

紅毛の人此邦の
 西海の端瓊の浦に
 時を定めて海外の
 富麗らすを外にして
 美に懲り鯨吹く愚昧の幕府
 倫安の姑息の夢を貪ぼりて
 春秋三百海國の
 英氣を枯らし南洋の
 天領西の侵入の
 民族かすめ奪ふに任せ、
 東海のみどり波瀾を隔て
 隣邦四億の民衆の
 興敗ただに冷眼に眺め、
 更に五天の擾亂の果、
 雪山の雲愁を凝らし
 恒河の流恨を籠めて、
 萬里の外の西歐の臣妾たりし無慘の跡、

絶えて迷曠の夢にも知らず、
 甘眠長く悠々の春を夢みて
 かくて浦賀の砲聲に
 長夜の夢のさむるに至る。

扶桑維新の光明の
 照りしこのかた五十年、
 世界の地圖に存在の
 跡をかすかに留めたる
 『ビグミーの邦』今にして
 列強の中一流の
 名をかち得たる時の運。
 大局廣く眺むれば
 世界に荒れし炎焰の
 餘燼全くは消え去らず、
 更に再び民心の
 ゆらぎあらべる颯風は

虚空をゆりて吹き来る
時警世の目にうつる
影は光か暗黒か。

時なりガブリエレ・ダモンチオ、
アドリヤの海アルプスを越して飛行の機上より
ドナウの岸の帝城に
爆弾ならず檄文を
雪と散らして敵國の
民に宣ぜし秋霜の辭ことば
ハプスブルグの光榮は
暗に沈みて同盟の
敵邦ひとしく崩れたる
後も「イタリヤ恢復の
業まだ成らず——熱血を
わかして叫ぶ民のため
烈強巴里に定めたる

不法の約に背かむ」と
をたけび高くフィウメの地
入りて略して坤球の
驚惶きょうわうの目をそばたてぬ。

公法の約と國民の冀望きぼうといづれをよしとせむ。
一塊の石抛てる湖面の亂れしづまりて
天心の月やどる時真相遂に判ぜむか。

劍俠驅りさる悲憤の血汐
湧きたつ跡にかへりみて
「過を見て仁を知る」
ラテンの民の意氣酌まむ。

其のガブリエレ・ダモンチオ、
天風の弓蒼海のおもての絃つるを拂ふ時
千波萬波の樂湧く如く、
冥想一たびオーリエント

詩影詩想のむらがり
 観じて九天雲烟の
 廣き高きをしのがんず。

歐亞の地圖を落葉の窓うつ下に打開き、
 西より東三千里飛行の道をたどり見れば――
 百年禍根をはらみし處
 世界の大亂かもせしほとり
 バルカンの空、サロニカを
 過ぎてトルコのアダリア、
 回教の史に著はれしアレツボ、次ぎて
 千歳の名におふ舊都バクダツト、
 ユーフレイツの大江の岸に臨めるバストラより、
 ペルシヤ灣上オホルムツの瀬戸の夕潮洗ひ去る
 バンデルアパス、チヨール、
 「エーダ」に歌ふ河の王雪山遠く湧き出づる
 インダス海に入るところ。

カラチを過ぎてヒマラヤの

雲を恒河の長江を

抱く五天のいにしへの盛は夢のデリイ城、

神聖の流罪業を洗ふ信徒の幾萬の

むらがり寄するピナールス、

天風あほり鯨鯢おどり

朝日夕日のくれなるに

夜摩天上の莊嚴の光を示す印度洋、

年に四度の收穫の豊饒を見るラングーン、

佛に捧ぐる三千の伽藍藍濃き空に入り

錦繡かざり寶玉つゞる白象群るバンコック、

佛領支那のハイノの市、

隣るは禹域「中華」の地、

鵬の翼も及ばねば

紫塞玉關遠からず、

巴陵洞庭影近く、

廣東福州後にして

揚子江頭北に飛び、
 旭日の旗の今かへる
 青島に次ぎ燕京を
 過ぎなば近し一葦帯、
 月は老い行く江上の羌笛、
 風は凄じ大漠の牧歌、
 義州釜山を飛びこして
 扶桑の空は瞬くま。

北冥の巨魚鵬と化し
 垂天の翼雲をわけ
 南冥の天地めざし行く
 其の荒唐のものがたり、
 其の幻想を凌ぎ去りて
 方所の差別風土の異同
 聯想更に時劫の古今——
 地誌と歴史の長巻を

かはるゝに披く如く
 大陸あまねく見おろして
 八機ひとしく電光の
 羽に東亞にかくよせむ。

あゝあゝ東海思をはせて
 鴻より早く長空に
 機翼ひとしく沖いる時、
 亞細亞大陸茫々の
 山河を越して興敗の
 跡はそよろに忍ばれむ、
 ダーヂリンの高原、
 ヒマラヤの連峰、
 飛行の途にそるゝとも
 大聖生みし五天の姿
 君憧憬の心眼に望むやいか
 おほいなる詩のあるところ
 聖あるところ、

あるひは赤道直下のほとり、
 大印度洋の落日の
 紅焔紅雲虚空に燃ゆる
 大莊嚴の影を見ば
 亞細亞のために幸祈れ。
 大陸亞細亞歐羅巴、
 虚空のうへに隔らず、
 千載永く光榮と
 詩歌と平和と文明と、
 明珠互に相啣み
 寶鏡互に照す時、
 天馬の道に南歐の
 詩神の寵兒生ける詩を
 つらねし勳朽ちざらむ、
 人間長く情ありて
 胸の鼓動に英靈を
 讃ずる限り朽ちざらむ。

おほいなる惱

さもあれ機體濛々の陰霧の層を凌ぐ時、
 電霰さながら彈丸の雨よりしけく敲く時、
 颯風あれて眞向に怒の槌を振ふ時、
 機上不斷の轟雷に更に電光の襲ふ時、
 おほいなる業おほいなる惱につぐを觀ぜむか。

感激熱き血を湧かし

櫻の花國の子ら

飛行の賓に幸祈れ、

何者慢にあざけりの

「賣名」の一句空界の

勇士のわざを判ずるや。

青春つねに感激の

泉湧くべき本にして、
 微を化石を塚中の
 枯骨を學ぶ何の意か。

火輪はじめて波切りて
 大西洋を越せし時
 フルトンの名に注がれし
 侮慢の言葉いかなりし。
 時の古今に憾むべく
 盡きぬパリサイの徒をよそに、
 黄金の巨鐘凜として
 曙光の空に鳴る如く、
 生ける英雄の詩歌として
 來りて活火わが髓に
 注ぐ勇士に幸あれよ。
 巨海の波浪
 大漠の颯風、

その障を下に見て
 東と西と空中の
 路を結べる大偉勳、
 その導に勵まされ
 南歐の機途追ふて
 百年これより歐と亞の
 文華の路も繋がれむ。

その來る時

嗚呼南歐の詩人フイウメの勇士、
 萬里長空をわたり來て
 八機一齊の友と共に、
 其いにしへは茫々の草また草の武藏野の原
 今は人口貳百萬數へて亞細亞最大の

誇りの都東京に巨大の翼たゝみて曰ふか、
 [Xθouoi: qeu eis tηNoupon nikoues tēdon]
 マルコポーロのあこがれし、
 又コロムバス夢みたる、
 近くはハルンの錦心繡腸、
 ローマンチクの色彩に
 寫せしところ畫きし處、
 君いま東海の現實に
 幻影の亡び嘆くやいかに。
 嘆くをやめよ幻影の亡び、
 心の期待を常に裏切る
 世の現實の恨みより、
 却りて心のおほいなる
 靈妙無限の跡を眺めむ。
 詩眼に眺むる一切は
 皆悉く詩の境、

南歐の詩人フィウメの勇士、
 來りてこゝに極東の
 空に盡きざる美を望め、
 恐らく扶桑千載の
 山川の靈髣髴と
 今おとづるゝ天才の
 筆を待ち得てほゝるまむ。

日本の風姿

花に埋るゝ紅の霞の春は遠くして
 今錦繡の秋飾る紅葉も菊もうつろへど、
 東海の驛五十三、
 廣重の繪の生ける影、
 舊き都の雪のあさ、

三十六の峯ならぶ
 下は鴨川冬枯の
 流さびしとかこつ時
 別に絃歌の春も湧く。
 山陽の岸二百里、
 長汀曲浦一々の
 うねり新たなの水と山、
 微妙の姿見るところ、
 メシナ、ナポリと影いづれ、
 マグナ、グレシヤ跡のこす
 エトナの下とのタオルミナ、
 並ぶはこゝに三保の浦、
 千秋の雪てりわたる
 富士のたかねを蔭として
 むかしいし仙女の霓裳の
 羽衣ういの舞見しものがたり、

西海こして耶馬の溪
 神斧彫める石の山
 共に比べて東海の
 天龍の峽幾十里
 東北の山波の如く
 溪に湛ふる明鏡の
 十和田の湖水——仙の郷、
 ラゴ・マジョーレを思ひ出む。
 東北の陸盡くる所、
 山は黄金の名に出でて
 萬丈の巨巖怒濤を呼び、
 鯨鯢躍る暗緑の
 千里の潮矢の如く、
 米大陸に通ふところ。
 南溟遠く湧きたちて
 驅くる暖流洋々と

水の百靈率る寄せ、
 オコック海の寒流の
 潮に混じ逆捲きて、
 雲蒸し波湧き風あらび、
 萬仞の淵タスカロラ、
 太平洋の名を外に
 巨濤駭浪空を拍ち
 海の堅城萬噸の巨大の艦もよろめかむ。

争競紛擾の
 一面すでに足れりとや
 青螺幾百松島の
 一灣かなた微笑を湛ふ。

あゝ山聳え水流れ
 深きは湛へ玲瓏の
 姿おのおの凝らす中、

たそ蓬萊の影留むる
 松島の美を聞かさらむ、
 東奥遠く隔つれど
 傾國の美の隠れざる
 跡はたかくか、憧憬の
 的、東西、千萬の
 人の思に往き通ふ。

東亞の美術

南歐の詩人フィウメの勇士、
 我が東海の藝園の
 花の盛を如何に見る。

老來長く青春の薫に色に筆にほふ

絢爛の權化チチアノウ、
比はわれの北齋か。

北斗を仰ぎて立てし盟、
貫く一念焰と燃ゆる
勇猛の意氣百年の永きを期して技みがき、
八十五歳豪健の氣を吐く「邪神雌伏」の圖、
遙に青春の筆を凌ぐ。

さもあれ北齋世界に知らる、
別に優りて知らる可く、しかも未だに知られざる
巨匠の數は幾何ぞ。

虹霓の色、七彩の巧、
遠き五天の法の道、
呼びし起せし媒ちし
源は千載の舊きより湧き、

「二十五菩薩來迎」の
偉大の佛畫燦として
渴仰の光心靈の
偉なるを忍び藝術の
神祕一味の美を極む。

チマブエ、チョットいでし世を
さかのぼり行く四百年。
東海の波浪空をひたす
邦この至大の藝術を
生めるを西はよも知らじ。

四明天台第一座
僧雪舟の偉大の畫、
その源流の末を酌む
筆を合せて西歐の
ゴングウルの眼は眺めしや。

頽唐の風流——東山、
勃興の藝術——桃山に
つゞく徳川覇府の春、
瑣國姑息のあと乍ら
太平の春はぐくみし
百花の榮のいみじきを見よ。

江戸の紫、京の紅
染めしにほひし彩の筆、
名匠雲と群がりし
末もいろどる綾錦、
『錦の畫』のみ西歐に
獨りあまねく知られしも憂し。

シヤパン、モロウの刷毛の上
わが極東の藝術の
あとほのかにも見るべきを、

やまと櫻の花の彩
西のそうびの香にふれて
やがて來らん春いかに。

すべては不可知——、謎を解き
神祕の鍵を握るわざ、
たゞ皇天の恩寵の
光を浴ぶる子に待たむ、
敬の一念身を捧け
俗と富との威に屈せず、
『席畫』のたくみ醜陋の
あとを厭へる子に待たむ。

藝園次第にその派を分ち、
更に競ひて『新』を求め、
『怪』に入りまた『變』に出づる、
『立體』の派か『未來』の派か、

誰か紛々の跡を見て
 渦流の中のたゞよひに
 審美のまなこ明けく
 よく研醜の判を下さむ。

バクトリヤ大漠の颯風あらびて
 吹き捲くる濛々の沙塵の中、
 カラバンのたどるべき途消ゆる時、
 仰ぐは天上の巨星の光、――
 斯くまた藝術その途暗く
 傳統その威を失ふ時に、
 列世かゞやく巨星の光
 啓示を未來の前途に垂れむ。

東亞の時局

南歐の詩人フイウメの勇士、
 君「稱唐」の名を蹴りて
 大戦亂の怒濤を押し切り、
 更に詩想の靈の羽
 人工の羽左右に延ばし、
 扶桑の郷におとづれて
 こゝに一面混擾の
 局を如何なる眼に眺めむ。

眼界狭く掩はれて
 執る筆鈍きわが傍
 潺湲の流水一年終り、
 萬片飛び散る花と紅葉と
 去りて無象の郷に入る時、

飛鳥の跡は窮まらず、
東北の天地蕭條の
窓に静に過ぎし年
起りし跡を列ぬるを、
雲漢の文、天上に
連ぬる君は憐まむ。

一絲亂るゝ跡絶えて
整ふ理路の明けき
論理の途は我に有らず、
空に横たふ一赤幟
我が陣勢を張るにたへぬ
われのミューズの荒む園、
たゞ蔓草のみだれ行く
跡を不敏の子に許せ。

*
*
*
*
*

小山鼎浦を弔ふ

世界にあれし戦亂の
雲收まれるあしたの空、
濛々の陰霧なほ暗く
不安の思繁き時、
銀河の光露を含める
湘南の一夜秋たちて、
鎌倉五山の愁烟深く
浄明寺門の傍に、
あゝわが小山鼎浦逝きぬ。

金華の西北、松島の奥、
東はたゞちに蒼海萬里、
米大陸に隣り合ひ、
天風海濤永しへに

枕に響き、袂を拂ふ、
 鼎が浦に呱呱の聲
 挙げしこのかた四十一年。
 哲人の薫を慕ひ、
 經綸の策をめぐらし、
 學窓のもと幾年の
 思を練りしあかつきの、
 風雲一たび吹き捲きて、
 怒濤の中に入り出でし君。
 金鐵の意思身を驅りて、
 蒲柳の質も顧みず、
 三寸の舌霜刃の
 威は幾度か衆賢の
 府に國のため民のため。

筆端また湧く萬石の泉、
 文を論じ詩を談じ、
 時を傷み世を嘆ぎ
 政界の浮沈、國の危機、
 跡を究めては激越の文、
 幽玄の境思ひを馳せては
 橄欖山の夕暗の
 高き祈りのあと讀じ
 靈山の會、光明の
 伴に心の調べ添ふ。
 風塵のもと、病める身を
 湘南烟波の岸に托して、
 高くも臥せし一代の志士、
 相向ふ絹張の山、
 七百年前將軍の
 風雅のあとを尙傳ふ、

芬蘭の香を明窓の
中に幾年君は缺きしを。

一黨一派——水か火か、

「憲政」の人か——「政友」か、

誰か紛々の跡を見て、

高士一代の懐を探らむ。

形骸寄する假宅の中、

狭かりし、又低かりし、

時世の暗を君いかにせし。

ああ、東方のあけぼのの

くれなるの色近づけど、

頭上は君に暗なりき。

奴隸の道か宦官の

威か混濁の世に飽きて、
思を無象の郷に馳すれば、
明月照りて清風薫る。

さるにても、四海の波瀾

大戦亂の収まりの

あした再び世の悶え、

勞働の子等聲あけて、

束縛の鎖絶たむ時、

さもあれ百年地窖の暗に

眼は光明にまだ馴れず、

盲動これより幾度か

迷妄の群驅らん時、

君その生を長うして

怒濤の岸の宵暗に

燈臺の火と成るべかりしを。

天上の虹霓とこしへに脆く、
地上の芳蘭空しく碎けて。
孤館の旅に淋鈴の雨聴く思ひ、
長江の白帆遠く雲と紛ひて
愛兒の影を引き去る如き
思ひ薤露の歌は誘ふか。

五稜の衣輕うして
其馬肥ゆる今の時、

邊境の空に、マチニの文
襟を正して夜半に誦すれば、
尊とし一代哲人の訓、

「幽玄の中敬虔の
意志ある所他の世界
また靈魂の勤あらむ、
信ぜよ」とこそ尊としや。

ああ鼎浦、
靈今去りていづくに翔くる、
銀漢遠し千萬里、
いづれの時か神祕ほどけむ。

眞島博士の愛兒を弔ふ

いづれの時か神祕ほどけむ、
聯想はしなく過ぎつる春に。

春は名のみの時にして
空牙え返る風寒く
廣瀬の流咽ぶ時、
たそ斷腸のしのびねに
逝く魂を悲める。

やがては照らむ金剛の
光か珠か花にして
風に薫する幽蘭か、
樹にしていみじ梅檀の
双葉はすでにかほりしを。

善きに加へて善かれとの
暗にはあらぬ親ごころ、
こめし思はあだにして
手術の臺のねふりより
往きて歸らぬ天のをち、
花とにほひと光明と
一つにまじる天のをち。

あゝあゝ此兒純眞の
心と信と清淨の
思眞珠の精の如く

末期いみじき祈より
翰林の上一代の
譽たうとき恩愛の
父をほまれの淑徳の
母を望と信仰と
愛の教に導ける
いさを何等の言に讃ぜむ。

短き命春の夜の
朧の月を待ちあへず
ひとひら雪に寒梅の
薫りむなしく散る如き
はかなき跡も尊としや。

『實』は遂にみのるなりけり、
人生の秋つひの果を
待たずも遂に『みのる』なりけり。

森村翁の讃

更に老年八十一、
 泥中の白蓮、死海の明珠、
 東方未開の世の習ひ
 官權金權互に結ぶ
 暗夜の飛躍、白晝の横行、
 かくして集むる巨萬の寶、
 絃歌と綠酒と放縱と
 靈を賣り肉を腐らし、
 頭上に積める薪の重さ、
 子孫の爲に蛇蝎を作る
 無慘の輩の中にして、
 俠骨高く一代にかほり
 名のみかほれる強慾の
 巨大の權に嚇されず、

千里獨往、凜として
 ひとり奮ひしあと思ふ。

烈士の暮年、心靈の光新に、
 十字架の教によりて
 西山に傾く日影、いやてらし、
 いはまの床に説く教
 いまはに残す筆の跡
 遂に古聖の徒に恥ぢず、
 大なるかな信の人、
 大平民森村翁。

勳か爵か功名か、
 地位か學位か、——茫々の
 幻霧の中に一瞬の
 盛を競ふ夢の花、
 財界の盟主、企業の策士、

皆紛として流星の
消ゆるが如く亡び去り、
大靈の息いぶく時
みな北邙の塵として
無限の淵に沈み去らむ、
残るは天と地と時と
その精髓の人の誠。

板垣退助氏の頌

此の年偉大の彼も逝く、
南海の産、一代の雄、
自由の先驅、維新の功臣、
果は猛炎おさまりし
死火山の影、聲もなく、
老いたる麒麟、涸れたる大河、

碎けし芳蘭、錆びし寶劍、
いにしへ岐阜の刺客の双
むごくも彼を逝かしめず、
残骸曳きざる無惨の幾年、
さもあれ落日最後の光、
大平民の熱火熱情、
未だ全くは消え去らず、
野蠻の遺風、惡差別——
人爲の階級たやすべく
死後に残し、一片の意氣、
なほ凜として贅物の
膽を冷すに足るべきか。

あゝ光榮は斯くと見よ、
陰雲拂ひて光を仰ぎ、
荆棘拓きて花を植ゑ、
東亞千歳陋習の

長きを破り、自由の大義、
大光明を大空に
現ぜし偉勳とこしへに
わが憲政の史に残る。

あゝ光榮はかくと見よ
『板垣逝くも自由亡びず。』

一つの死

風無きに落葉の雨はらくくと
わが閑庭の秋の韻律。

一片の落葉支ふ蜘蛛の巢か、
それはた風に破れし断片。

脆きは蜘蛛の巢、脆きは落葉、
脆きもの脆きを支ふ、
共にいくばく残る命ぞ。

こゝにも一つ終の別れ
おくれしものは後に嘆かむ
果ては一つの土に歸れど。

閑庭の秋のさびしき
門前の鈴けたままし、
一片の號外何をか告ぐる。

逝けりや閩族最後の巨魁
千潮次第に引き去る岸に
残りし一塊巨大の破片、
嘗ては波濤の怒りを凌ぎ
浩々はてなき潮を分けき、

今また泥土の堆積おほふ。
 邦家の基に勤めを捧げ、
 陋習破りて輿論にたより、
 大義を正して其分守り、
 誠をいたさばいみじきものを、
 その材計らずその身を知らず
 麟閣の上黄金の
 印を帯びたる不似の分、
 世界の局を眺むべき
 一双の眼に乏しくて、
 歐の中原軍閥の
 巨魁の力を信じ過ぎ、
 施設の道を誤りて
 遂に悔恨の氣を病める、
 老骨いとど憐むに堪ゆ、
 さはあれ、一片誠は残る、

(化石の誠も無きには優る)
 九泉のもと逝けるもの
 皆一齊に安かれよ。

大戦の追想

あゝ日月の色いたみ、
 風雲山河共に泣ける
 世界にあれし未曾有の大亂、
 思ふも戦慄たへがたき――
 あゝ彼れホーヘンツォレンの驕兒、
 『敵を知りまた我れを知る』
 古今にわたる兵家の模範
 孫子の教目に觸れず、
 セイヌの岸の華麗の大都、
 シャンゼリゼイの路直く

凱旋門のそばたつ處、
たゞ一朝に屠るべく、
幾十年の久しきの
備をつめる百萬の兵
あげて、公法一片の
紙と宣して中立の
領に無慚に侵し入り、
十有四寸の巨砲の力
リイジ、ナミュル、ブラツセル、
また、くひまに抜き去りて
天魔の嘻々の凱歌のほこり、
續いて東又西に
百戦常に百勝の意氣。

ヒンデンブルグ巨像のほまれ、
ルウデンドルフ渴仰の的、
悪運永く榮ゆべく

ほこりし幻夢一朝にさめ、
一千九百十八年
月の十一、日の十一、時の十一、屈辱の
白旗はフランス北方の空。

聯盟の諸邦二十七、
歡呼に續く世界の平和
光忽ち乾坤を
照らすと見しも幻か、
西歐の文明一面の
弊久しきにたへざりし
波瀾の崩れ、戦亂の
狂ひに更に促され、
更に恐怖の度を増して
あれ来る階級苦戦のさげび。
無意識の中、人間の

生を改め、全歐の
爲めに計りし傀儡か、
セントヘレナの流竄の人、
ホーヘンツォレン彼も亦
知らず知らずに光明の
新天新地の爲に備へむ。

狂瀾怒濤

さもあれ光明遠し、遠し、
一千九百十九年
暮秋のあらし錦を拂ひ、
アジャ大陸北の端、
シベリヤの空幾萬の
卒氷雪に悩み行く
天地一白茫々の

中に、オムスク敗滅の
はて運命の明日如何に。

禹域の南、長江の
ほとり同胞安からず、
ABCは何の意か、
更に遙かに海外の
冒險浮浪の群寄せて、
われの臥榻のかたはらに
民族自決の聲を揚げ、
鷄林の空燃えいづる
薪に油添へなんす。

波瀾の起伏、四海にわたり
魔女の鼎の中に見る
渾沌紛擾、怪と奇と
白日の中、光明の

てらすが中に行はる。

妙音の名手バテレスキイ
今政界の杖ふるふ
そのポーランド國疲れ
民衰へて隣邦と
干戈の争尙ほ絶えず。

パンシア、エンベル極刑の
宣告を受け海外に
逃れさるもの忽然と
クールデスタン大封の
金冠あらたに戴きつ。

骸骨の冠り聯合の
敵軍の膽破りたる
猛勇の元帥マッケンゼン

運命つきて囚はれし
その監禁を今は免れ――

人道の聲、正義の聲、
聯盟の聲まづ擧げし
北米の邦今にして
黨派の策か私か
平和の批准われより拒む。

更に四海の大波瀾
暴るる一脈襲ひ來て
『米貴くして窮まらず
年々珠を買ふに似る』
隨園の嘆まのあたり
扶桑の邦は安からず。

熔爐に燃ゆる火焰の中、

鼎に沸きたつ熱湯の中、
 過去の權威は夢と崩れ
 未來の幻影うづまきわたる
 渾沌の時期、
 醜酔の時期、
 改造の時期、
 暴風の中、
 狂浪の中、
 激動の中、
ライグブニコウダブルユウ
 H. W. W.
 ボルシェビク
 Bolsevik, Striker
 まねか自覺か
 東海の邦
 また労働の咆え叫び。

*
 *
 *
 *

民よサイレンの聲を恐れよ

民よ、サイレンの聲を恐れよ、
 天を否定し信を罵り、
 「神と敬と律と道と皆ブルジョアの幻影」と
 笑ふ妖魔の聲を恐れよ。
 見ざるや照す歴史の明鏡。
 平等友愛自由をよびし
 いにしへフランス革命の
 神聖の業、末流の
 濁り次第に波瀾をあけ、
 ボルシェビズムの今に似し
 セイヌの岸の赤き狂ほひ、
 尊き名もて犯したる
 無惨の罪と悲劇幾何。

更にふたゝび又三たび、
七月の革命、二月のそれ、
その果濁浪うづまきわたり
靈火の焔消えし時、
民衆の友、友をうらぎり、
政權ひとたび其の手に歸して、
たゞ物欲の私に
虎狼の如くに振舞へる——
すべては唯物思想の餘弊。

天を敬せず道を信ぜず、
たゞに功利を唯一の
的とねらひて如何にして
献身犠牲の道を踏み得む、
權威と富貴を前にして
嗚呼彼いかで氷霜の節を守らむ。

マチイニに聴け

その狂妄の群を外に、
襟を正して南歐の
聖者の聲に耳立てよ、
遠きいにしへアゼンスの
聖と其軌を一にして、
[Pensiers ed Azione, Dio e il popolo] の
哲理親しく身に踏める
ヂユセプ、マチイニ、崇高の
『改造の權化』末世の聖徒、
『其の心藏を開き見ば
イタリヤの文字認むべき』
彼ロンドンの孤館の夜半、
筆を下し、千古の教
經綸の策、治國の道、

宇宙の底に潜み湧ける
幽玄神祕の聲に和して
残しし言に耳立てよ。

春蠶吐きなす幾丈の糸、
賢人書き残す幾卷の書か、
一千八百七十二、
傾斜の塔のピサに逝ける
六十七年生を收めて、
粘を解き縛を去る
靈は無窮の光逐ふ。

瑤琴ひとり愁を抱き
その人間の世にとめし
精華幾片前に見る
冷笑の聲無恥の聲、
懐疑の聲は曰ふ古しと、

しかなり古し古し古し、
古し人間の情と等しく、
古しアルプスの雪と等しく、
古し地球の生と等しく、
古し太陽の熱と等しく、
古し星宿の列と等しく、
古し宇宙の大と等しく、
古し「永遠」自己と等しく、

惱める魂

世界にあれし戦亂の颯風に打たれ
恩愛の子を珍寶を皆失ひし
百千萬の心の痛み、
千歳の傳統力なく
金色十字の標象の

基の光かはらねど、
微を穿ち細を窮むる
碩學幽界の魂を思ひ、
流血、火焰、掠奪、叫喚
現世の冥府の狂ひ見る
文豪有限の神を夢みぬ。

橄欖の山、ゴルコタの野、
佛陀伽耶の塔、鹿野の苑、
みなおほいなる「いつくしみ」
皆おほいなる「悲み」の
權化のあとを見しところ、
人間の魂あこがれて
幽玄神祕の光見るべく
遠く千歳のむかしに返る。
その靈魂のあこがれの

無窮の基、九天の
上の無象の高きより――
探れど幽淵はてしなき
不可知、不可量、不可思議の
極み、其前ひれふして
注ぐ涙はひとり賢し。

眞善美、一のトリニテイ、
理と神明と永遠とまた神聖のトリニテイ、
その聖壇に渴仰の靈の香火を燃やすもの
正に「四海の同胞」のおほいなる意義悟り得て
一切の聖に信を捧げむ、
一切の敬に禮を致さむ。

* * * * *

東方の聖經

オーリエント、オーリエント、オーリエント、
 光はじめてにほふほとり、
 雷音潮音とよろきし
 いにしへ遠し二千年、
 人天ひとしく讃せしところ、
 光明十方に溢れしところ、
 それも流轉の理に洩れず、
 八萬四千みな鳳毛にあらざれば
 末流次第に濁波を揚げて、
 或は煩瑣の形式の罪、
 或は腐敗と靡爛の塊、
 或は牽強附會の辨、
 或は末派の區々の争ひ、
 摩尼の光を汚しおほへど

その垢掃ひ曇去るとき、
 東方聖經無限のかゞやき
 永く心靈の世界に照らむ。

南歐の詩人思を潜め、
 こゝ靈泉のみなもとに
 酌みて荒れたる西歐の
 思想の沙漠の上にそゞけ。

「一切の現象、有爲の法、
 生ぜず、滅せず、來らず、去らず、
 一に非ず、異に非ず、常に非ず、斷に非ず」
 その一片のひゞきにも
 むかし五天の空に映ぜし
 燦爛無上の光明の
 跡をほのかに見るべからずや。

紺紙金泥寫經

その渴仰のあとの一ふし、
いはれゆかしき上藤の
筆染めなしし金泥の文字、
今わが前に披かるる。

勾欄からむ紅の袂につゝむ露おもく、
天の錦繡たちきりし夕の雲の褪むる時、
暮山の鐘に花散りぬ。

瑤臺の夢いくよひぞ、
鏡湖しづめる月冷へて
玉笛あすは秋に咽ばむ。

あゝ漆なすたけの黒髪、

撫でしけづりし幾春ぞ、
遠山のみどりひそり残りて
心の暗の墨染の袖をかゝけてうち向ふ
羅旬の机(ちりばめし花か百鳥紅は
碎け影失せ香も消えて)
五天の空に轟きし無上法音妙音の
餘韻をつゞる金泥の筆。

あゝ目あるもの、靈境の光ほのかにかひまみて
神祕の影に震ふもの、
見るや笑と涙とのあなた生死のおほ海の
とゞろくあなた限りなく
無象の波瀾うづまけり。

その幽冥の海知らず、
人はむなしく漣の
小河の岸に咲く花か、

散りて不可知の大潮に
ひかれ深淵の底くぐる。

葡萄の美酒のくれなるの
光たゝへし壺碎け、
玲瓏の歌玉まろぶ
彩羽やどりし籠やぶれ、
寶鏡錆びてやどる影なく、
輕羅すたれてつゝむ身ぞなき。

今「追想」は歩あゆひそめて
露を含める玉殿の夕、
「愛」と「哀」との手を取れば、
なほ紅頬のさびれゆく
なごりの匂ひ、傷魂の
といきに胸や高まらむ。

その煩惱の大海に
たゞよふ「泡」をみそなはし、
大悲大慈のまなじりを
かへさせたまへ無上尊。

『金剛般若波羅密經
姚秦三藏鳩羅摩什譯
法會因由分——如是我聞……』

冥目やみてつゝましく
震ふが如き寒月の
霜牙ゆる夜に凜として
金泥の筆くだししや。

風とゞまりて大江の水波は定まり
烟散じて碧山の月影は澄むべし。

東方の聖經（再び）

東方聖經無限の光、
 譬へば天の穹窿に
 銀漢、星辰、星霧、星雲
 むらがりわたり、一々の
 星みな燦爛の光明に
 十方の世界照すに似たり。

永く人類の驚嘆の的、

六百卷の大般若、神聖の般若波羅密多、

大佛頂首楞嚴經、

楞伽圓覺涅槃經、

不可思議解脱維摩經、

妙法蓮華一乘の經、

〔常不輕〕の功德より佛果を得たる物語、

經を奉ずる末流の排他のわざを戒めむ）

西方の彌陀大愛の教を説ける三部經、

四十九會の金口の教集むる寶積經、

八萬四千法門の高き貴き一切は

いづれか實にあらざらむ。

たゞ末流の劫を過ぎ

敬虔の人崇拜の

熱に驅られて誤りて

加筆省筆恐らくは

大摩尼寶に疵つけし

その跡無しと誰か斷ぜむ。

高等批評の見るところ

清鑑いつか春秋の

長きにわたり明月の

光寒潭に遂に澄むべし。

たゞ木を數へ林を忘れ、
一念の誤つたへつたへて
末流互に誹謗を事とし、
一字一句の争に
忍辱おのゝ忘れられて
はては流血の惨きに到る。

ナザレの聖の教の史、

中古煩瑣の争の

ホモイウーシヨシレ
Homoiouision Homoiouision

蠻觸二邦の跡見る如き——

或は新舊二教の戦、

三十年の久しきにわたりて歐の中原を

鶏犬の聲絶ゆる迄沙漠の如く荒し去れる——

或は覇業の夢碎けアメロンゲンにすくまれる

「破れし偶像」その昔「黄禍」を唱へ黄色の

「異教」絶つべく全歐の「聖」十字軍唱へたる。——

皆因襲の囚はれに道の大局認め得ず、
寛容の徳知らずして、暗に迷ひし狂妄のはて。

あゝ人天の路を繋ぎ、妖魔の暗を絶やすべき

光明の軍、一切の古今にわたる教の道、

(萬法を統ぶる只一理)

其の崇高の名の下に人類互に血を流す

何等の矛盾何等の背理、

其の惨劇はすでに足り、

其の迷妄はすでに古りぬ、

起て改造の新的世

起ちて妖魔を地に踏みて、

一切の信に禮を拂ひ

一切の敬に敬を捧げよ。

*

*

*

*

*

大方廣佛華嚴經

廣大を説きて包まざるなく、
精微を述べて備はらぬなく、
十方虚空を一毫に含み、
無量刹土を芥子に納むる、
おほいなるかな華嚴の世界。

華嚴の莊嚴わが目を眩し、
華嚴の光明わが蛾を誘ひ、
華嚴の炎熱わが血を湧かし、
華嚴の芳醇わが魂酔はす。

夜摩天上百萬の金網
兜率天上億萬の光明
たゞ比なくおほいなる

華嚴法海の一しづく。

風浪消えて大海の水の鏡と澄める時、
天上の姿一々の影悉くうつる如く、
無明の劫波しづまる時、
煩惱の劫風収まる時、
世尊無上の位に坐し、
海印三昧の定の中、
一切三世の法を皆見る。

「顧み見れば無量の刹土、
無量の劫の遠きより、
衆生の煩惱濁らすところ、
分別欲樂一相ならず、
心に随ひ業を造る……
」その業力に流轉の姿、
幻夢の如き泡の如き、

一切の衆生大悲に救ひ、
 悪業魔業の惱ますところ
 正法を誹る極悪人、
 みな大愛に救ひ取らむ』と。

四大海水のたゞ一滴、
 超世金口のたゞ一音、
 抜きて西歐の客に示さむ。

ダンテ生れし西暦の一千二百六十五
 その年遠く遡る五百六十六春秋、
 大唐の聖曆第二年、
 干闥の國に求め得し
 貝葉靈文海を踰へ、
 漠を渡りて譯成れば、
 五天の空に惜むべく
 梵文跡をとゞめねど

なほ燦として仰ぐべく
 八十華嚴一切の
 法界の上に永く照る。

西歐たれか人ありて
 この東方の至上の寶
 更にアリアンの文に返さむ。

詩の大海——ダンテ、

東方聖經無限のかゞやき、
 詩なり歌なり妙音のしらべ、
 或はやがて西歐の文化の中に流れ入り、
 新たに偉大の詩歌を生まむか。

詩の大海に注ぎ入る百千の流、億萬のしづく、

詩の諧音を組みたつる百千の律、億萬のしらべ、
 詩の大陸に充ちしける百千の森、億萬の花、
 詩の大空に照り光る百千の銀河、億萬の星辰、
 詩の天領を構へ成す百千の邦土、億萬の民衆、
 詩の宮殿をいつきなす百千の樓閣、億萬の衆寶。
 美なるイタリヤ、南歐の海は濃藍の色そむる邦、
 野はひなげしの眞紅の春さながら火焰の燃る邦、
 歌ふミニオン憧れし「チトロローネン」の花咲く處、
 金色ひかるオランダ、
 ミルテ静にロルビイレ緑に高く立つ處、
 ダンテを生める美なるイタリヤ。
 そのアルノウの岸逍遙の
 一日サント、クロ、チエに
 むかし東海の旅の子の
 仰ぎし巨像、詩聖の姿、
 星の冠の天人を

護となして沈靜の
 おもかげ眠る海の如く、
 瘦せたる脰に頬支へ
 思を無窮の天に馳する、
 あゝダンテ、アリギエリ、
 月桂の樹のしげみより嵐にもまれ出る月、
 滄溟のおもて激浪のおさまるあとにうつる星、
 煩悶苦惱の大なる海の底より得し眞珠、
 中古千年かくて聲を
 百丈の銀箏虚空にかゝり
 一々の絃白雲の峯吹き捲くる大風の
 吹嘘に應じ鳴る如き巨靈の歌にかち得たり。

レオナルド・ダ・ヴィンチ

偉なるイタリヤ、——永遠の

ローマの都たつ處、
 一木一土おほいなる
 名ありし者の化る處、
 關河覇國の興亡を
 經て近代の文明の
 曙光はじめて照りし處、
 その燦爛の光明の
 昇るこのかた湧きいでし
 名匠の群いくばくぞ。

聖は五天の曙に尼連禪河の照し、身、
 聖はゴルコタ丘上に神の如くに逝きし影、
 今人界に萬能の才を見すべく降り來し
 『驚異』の權化レオナルド。

三千の秀才等しく榮え
 一代の藝園いみじく匂ふ

春南歐の七彩の光の中に抜け出で、
 神祕の巨靈澄み渡る眸あまねく創造の
 あらゆる領を貫ける――

微を分ち細に入り
 小大洩さぬ緻密の知性、
 天を翔り地に潜り
 一切を蔽ふ無邊の想像、

『時の唯一の娘なる眞理』に歸依の生の跡、
 曙の紅夕暮の紫染むる

天上の榮を下界に移す術、
 ヌーミヂアンの白き石、フリジアの岩、金剛の
 力に刻み活かす術、

兼ね得し絃歌詩賦の道、
 思索の幽洞暗きを尋ね、

『數理の樂園』廣きを探り、
 殿堂宮殿城壁運河巨大の腕に作りなし、

人體の線山嶽の姿河流の廻り行く路悉く究めたる
玲瓏の才、不可知の神祕、

彼れ變らざる永遠の自然の法の前に立ち
眞理の海の渺々の果なきを見て肅として、

『勤めし日の後甘き眠、

勤めし生の後樂しき死』

吟じて無底の幽淵思ふ。

大なるかなレオナルド、

一切の世はダ、ホンチ

名に光芒の極みなき

靈火とこしへ忍ばざらめや。

東亞の微なる小詞人、蛾の燭光にあこがるゝ
讚美の筆を揮ふ日をさかのぼり行く四百年、
彼れ人界を捨て去りし一千五百十九年、
時を禹域に尋ねれば

長江の水ひろがりて鄱陽の湖と成る處、
千古の大儒王守仁、

恐らく未だ西歐の空に見えざる一巨星――

(帝王の聖者オーレリアス、

『金殿玉樓の中になほ道を踏み得』と千秋の

妙音宣りし聖の人、

奴隸の聖者、エビクテタス、

宰相の聖者、諸葛亮、

儒臣の聖者、王守仁、

風雲の機を胸にして宸濠の亂治せし年、

東と西と心靈の道隔つれば

大なる靈は互に相知らず、

無限の軌道を虚空にゑがき

知られず過ぐる彗星の互の跡にさも似たり。

* * * * *

李太白と杜少陵

唯に同代の上とせじ、
 オクシデント又オーリエント
 國の精髓、文の華、
 詩の美、微妙の香に薫じ、
 流に澄める月の影
 捉ること難き跡に似て、
 異邦の俗に入りがたし。

崑崙の東、長白の西、
 時は盛唐の文華の極み、
 青蓮起ちて千春に
 輝垂れし聖の筆、
 『古風』の精華連ねさる
 五十幾篇爛として

永く大雅のあとをつぐ。

『白帝の城』『廬山の瀧』

『沈香の亭』『牡丹の詠』

たゞ蛟龍の片鱗か、

天山出づる明月の光長風の吹くに駕し
 萬里はるかに玉關を渡るに似たる彼の歌。

杜陵の詩聖百代の

粹を集めて華を咀ひ、

書を読みて萬卷を破り、

筆を下して神あるに似し

『北征』の古詩『秋興』の律、

剖かば紅血ほとばしり

投げなば金石の音あらむ、

兵戈の中のさすらひに

恩愛の子ら飢に逝き、

一枝に集くふ鶴鶴の
跡を學びし辛酸に
から得し萬歳の名も悲し。

太白少陵時を一に
羅浮天台互に對し
長江黄河等しく流る
此れワチカンのラファエルか、
彼れシスチンのミケランジ、
其大なる星二つ
無知の暗黒たちこむる
烟霧は西に光蔽ふ。

ミケランジエロ及びラファエロ

崇大の侮慢一代の俗を見くだすミケランジ、

美の一切の創造の靈にひれふすミケランジ、
八十九年金剛の意志を貫くミケランジ。――
萬華の春を粧ひし巨靈次第に去りし後
なほ夕陽の照す影長空の雲いろどりて
更に光を昇るべき無象の天に追ひし人。

カルララの山切りいだす

マイプル生きておほいなる

モーゼス夜半に星と語り

シスチンの中、神聖の

狂に熱して幻影の

群壁上に湧きいづる――

聞かずや千歳不朽の言葉――

「完美は小き細きに起り

完美は小き細きに非ず

あゝ群小の嫉より苦惱は常に山と積める、

さもあれ法王帝玉の敬と愛とに包まれし、

光明暗影濃かりし巨匠、
比を樂界に求むれば
ラインのほとり月光の曲を夢みし天才か。

緑眸の女神アテイネイ
金甲穿ち雷霆の
神より生れし跡に似る
ラファエル、サンチ、一朝に
美の圓滿の域に入り、
三十七の春秋に
窮めし巧百千の
はるけき遠き世を照す。

天使の如く美はしく、
少女の如く柔かに、
富貴、歡樂、光榮の
中に王公の生送り、

その若き死も皇天の惠の外にあらざりし
藝園の奇蹟、萬古の畫聖、
ローマみどりの天の下
萬神殿の中にして
香骨眠る——幸あれよ。

南歐の詩人と藝術家

二十四番の春の華
東亞の曆に呼ぶ如く
ルネイッサンス一代の
衆芳競ひて目を奪ひ、
アークャンゼルの群に似る
チチアノ、コレヂオ、チントレト、
皆イタリアの名の上に千秋の光瀝ぐ見よ。

妙音の群ベトラルカ、又タツソウとアリオスト、
メタスターシオ、ゴルドウニ、アルフェリ、モンチ、ホスコロウ、
近くは薄命のレオバルデイ、更にキアリニ、カルドッチ、
天上つらなる諸星に似たり。

ガブリエレ・ダヌンチオ

天その邦に幸ひし、
超人の群巨匠の群
おのゝ飾る一代の
文化の誇香は高く、
遠く千歳の後かほる、
其ほまれある傳統の
桂の緑、南歐の
かほり、ミューズの恩寵の
豊けきガブリエレ・ダヌンチオ、

半生の詩名縹渺の
雲を傳へて、東海の
空に響けり、——オーリエント
こゝにも熱き血の潮、
大いなる物高き物いみじき物に
あこがるゝ青春の聲断え果てじ。

時は風塵のあれ狂ひ、
花を啣める青鸞の
翼しばらく下界にたれ、
祖國の民の胸の琴
震ふしらべに鋼鐵の
絃を弾ずる時にして、
君勳業をアドリヤの
岸の彼方のフィウメの地、
陣雲の上劍光の
閃しめす雄々しさや、

十二の銀筆花を歌ひ
三千の金甲葡萄に酔ふ、
そも人生のおほいなる
生ける詩君にふさはしや。

嗚呼シムボリストか、デカタンか、
四十年前チュウトンの
馬蹄の下に荒らされし
バリ滿城の恨吞める
沈淪の時代——天に翔けり
理想逐ふべき靈の翼
垂れて現實の享樂に
醉生夢死の日を送る、
例へばグリース末世の詞藻、
あるひは東方十六の
胡人種あらびし世の亂、
道窮まれば竹林の

中に身を避け世を逃れ
世を嘲りし高踏の派か。

時は廻り世は轉じ
チュウトン敗れてラテンの光
正に再びかゞやきて
戦亂の餘燼消えん後
桃李三千あらたなる
春を再び迎ふべく
雷霆の響、海潮の音
高く四海に呼ばんはたそや。

あゝ天才に老あらし、
錦囊の上、黄金の
線に鴛鴦をつゞる如く、
更に詩情を富ましむる
君靈妙の想湧きて、

わがオーリエント日出づる處
 天の一方に目をきわめ
 懷を放ちて飛び來るや、
 薫する翼ひらき延して
 花は文章を照らすべき
 三春の盛遠くとも、
 扶桑の民に心あり、
 血あり、情あり、南歐の
 ラテンの精華東西の
 文化の道をつなぐべく、
 虚空をわたる三千里、
 生ける英雄の詩歌として
 飛び來るあとに感激の
 脈搏高く打たであらめや。

オクシデントはたオーリエント、
 光を結び香をあはせ、

坤球一箇黄金の
 鎖にまよふ愛と愛、
 太平大西二洋の潮
 等しく花を泛べ去り、
 へだてぬ空に淨界の
 いにしへの夢、靈鳥の
 百千の群舞ふ如く、
 平和、恩寵、祝福の
 標象の船飛ばん時、
 その時待てる憧憬の
 思につよむる一小詩。

『天馬の道に』註

アルコック、ホーカア、R三十四。(643)

大西洋を横断して初めて成功した。はアルコック氏である。此若き成功者は不幸にも其後飛行の際惨死した。

ホーカア氏は其れに先だちて殆んど成功せんとして僅かの着陸前に海に墜ち救はれた。

R三十四號は飛行船として大西洋横断に成功した最初のものである。英人は之等の人々皆同族人種なるを見て狂ふばかりに喜んだ。

ポーロ(マルコ)、コロムバス(クリストファ)。(646)

マルコポーロ東洋に來り元朝忽必烈に仕へた。コロムバスの遠航はマルコポーロの跡に刺戟されたとの事。

世界の霸王、心靈の霸王。(646)

ローマの世界征服また中世ローマ法王の宗教界に君臨したこと。

オーリエント。(647)

Ex Oriente Lux (光は東より)

著者はオーリエントといふ語のいかにも好調なのを好く、
オクシデント(西)の語も同じくよろしい。

名工レニ。(647)

伊太利の畫工ギド、レニの筆、曙の女神(オーロラ)の名高き壁畫、天井の壁畫、
がローマにある。

ヴェニスの子。(647)

即ちマルコ、ポーロ

詩美の國。(650)

古の 그리스 國

イサス、アルペラニ云々。(650)

アレキサンダア大王がメルシヤ軍を敗りし戰場。其後軍を進めて印度に入つた、インダス、オクザスのほとりまで進みし後兵卒が前進を拒むので退陣した。

脂粉三千。(650)

アレキサンダア大王メルシヤを破り其皇宮に入り皇女を納れて妃とした。

妖女の聲。(650)

美人タイスの言に従ひ酔狂のアレキサンダア火を放ち、パーセポリスの大宮

殿を焚いた。恰も項羽が阿房宮を焚いたやうに。
詩聖 (650)

ホーマアの詩卷をアレキサンダア常に陣中に携へた。
オリインボスの十二神 (651)

ギリイスの美術家がオリインボス山上に住める神々を彫刻した其影響はアレキサンダアの印度征討の結果から東洋に及んだこと夥しい。

哀蟬の曲秋風の歌 (651)

共に漢の孝武帝の作。——左を『古詩賞析』の註解から抜く。
王子年拾遺記に曰ふ。

『漢の武帝李夫人を懐ふてまた得べからず、時に昆靈の池を穿ち翔禽の舟を泛べ帝自ら歌曲を作り女伶をして之を歌はしむ、時に日すでに西に落ら涼風水を激す、女伶の歌聲甚だ適し、因て落葉哀蟬の曲を賦して曰ふ。

「羅袂兮無聲。玉墀兮塵生。虚房冷而寂寞。落葉依乎重扇。望彼美之女兮。安得感余心之未寧。」

秋風辭は『秋風起りて白雲飛び、草木黃落して雁南に歸る』……に初まり『歡樂極まりて哀情多し、少壯幾時ぞ老を奈何』に終る有名の歌である。

蠻族次第に西に馳せ (652)

武帝の遠征軍に逐はれて匈奴次第に西に去つた。其の結果所謂民族大移轉とローマ瓦解とを來した。

半島イベリヤ (654)

スイイン及びホルトガル

老雄の使 (655)

伊達政宗 ローマに使者一團を送つた。支倉常長は其長であつた。

フィリップ、フランソア (655)

支倉がローマ法王より賜はりし名——支倉の畫像今に伊達家に保存せられる頗る立派の作である、勿論當時のイタリヤの名工のであらう。

紅毛の人 (656)

和蘭人

瓊の浦 (656)

長崎港

南洋の天領 (656)

スマラト、ホルネオ、ガヤロ等當時皆和蘭等に掠められた。

ビグミイの邦 (657)

ビグミイは侏儒、曰ふ迄もなく日露戦争以前の日本は歐米の人士の殆んど度

外視したものであつた。
ドナウの帝城 (668)

キーン市——ダモンチオ飛行機上よりこの市に數萬の檄文、投下した。
北冥の巨魚 (662)

莊子の卷頭にある話

天馬の道に (661)

本篇の題名はこれから取る、但し此天馬は支那の詩に曰ふ天馬では無い(それは只駿馬のことである)グライスの神話にある空飛ぶメガサスを指すのである。

フルトン (666)

蒸氣船成就して初めて大西洋を航せんとした時學者も俗人も一齊に嘲弄して空想の甚しいものゝ笑つた。或學者は曰ふた。

「絶妙の工夫だ、しかし海にどうして路を作るのだらう」

クトノス、メン、アリス、テールローロン、ヘーコメン、ペドン、(668)

グライスの大悲劇家エスキューラスの傑作「プロメイトイスの繫縛」劈頭の句「大地の遙けき遠き郷にいたりぬ」

ハルン (668)

東京の文科大學に英文學を講じて我々を教へられた小泉ハ雲先生の原名、——先生の著書は(日本を寫されたのが大部分)盛に歐米に行はれる、そして修養ある歐米人士が日本を愛し日本を研め日本に來訪するのに與つて非常に力がある。日本國民は先生の名に對して毎に感謝を捧げればならぬ。

メシナ、ナポリ (670)

伊太利の南部、ナポリ以南メシナ及びシ、リイにわたりて風景尤も美しい。

タオルミナ (670)

シ、リイ島の南岸タオルミナは昔のマグナグレシヤ即ちグライスの殖民地であつた。當時の劇場のあと今も残る、エトナの山を仰ぎ藍光の海に臨んで絶佳の名勝地、歌洲の畫工は大概こゝを巡禮的に訪づれる。著者の「東海遊子吟」の中こゝに詠じた一長篇がある。

ラゴ、マヂョーレ (671)

伊太利北部の名高き湖

山は黄金の名に出で (671)

金華山、——著者は天下の山水辭ある人々に金華山の來訪を切に勧めたい。其頂上の景及び頂上より燈臺及び海岸を一週する途上の景は雄大といはうか豪壯といはうか奇抜といはうか殆んど形容の辭句がない。

チチアノウ (674)

即ちチチアノウ、エツキオ(英語読みにはチチアン)エニス派の首領、色彩の豊麗はラファエルも及ばぬと曰はれた。恰度百歳で逝いた。(一四七七—一五七六)

邪神雌伏の圖 (674)

北齋八十五歳の筆、向島牛御前の神社の拜殿にある、筆力の豪健なること青年時代にも優りて驚嘆すべき極みである。(横山健堂君の論文より)

二十五菩薩來迎圖 (675)

高野山所藏國寶たる本圖は慧心僧都の筆と傳へられた。イタリヤ全盛時代の傑作に比すべきものと或る鑑賞家は著者に教へた。

チマブエ、デヨット (675)

チマブエ(ジョーバンニ)一四〇〇—一三〇二、フロレンスの名工にて所謂フロレンス派を起した運動の先驅者、彼の壁畫は頗る美しい。

デヨットは畫家彫刻家建築家を兼ねた名工、前者の高弟であつた(一二七六—一三三六)慧心僧都は(九四二—一〇一七)

ゴクウ (675)

佛蘭士の小説家並に批評家、日本の繪畫を西洋に紹介した功は重に彼に歸す

るであらう。

シヤバン、モロウ (676)

シヤバンヌ(一八二四—一八九八)

モロウ(一八二六—一八九八)

前者の傑作はバンテオンの壁畫等、後者の殆んど八千點の作品は彼が巴里市に寄贈したモロウ美術館にある。兩者共に東洋美術の影響を受けた。

空に横ふ一赤幟 (680)

「而異斯爲人、心異斯爲文、横空一赤幟、始足張吾軍」袁子才讀書の詩

鼎が浦 (682)

小山東助君は陸前氣仙沼の人、鼎が浦は同所の雅名である。

絹張山 (683)

鎌倉の絹張山にむかし頼朝錦繡を張りて政子を慰めたといふ故傳がある。

薤露の歌(漢代の詩) (686)

「薤上の露何ぞかわき易き露かわけども明朝更にまた落つ、人死して一たび去らば何の時か歸らん」

五稜の衣 (686)

「同學の少年多くは賤しからず五稜の衣馬白ら輕肥」(杜甫)

マチイニ (686)

伊太利の愛國者、豫言的革命者、文豪、彼は熱烈の信仰を有した。本篇の後段にもマチイニを讀してゐる。

眞島博士の愛兒 (687)

東北帝國大學は學者の淵藪として世界の學界に知られてゐる。

眞島博士は其理學部の教授で漆の研究に關して學士會院賞を受けた。同君の愛兒實君は珍らしく怜利な子であつたが、ヘルニアの手術の結果惜しくも逝いた。博士及び令夫人が今日信仰深きクリスチャンとなつたのは實君の平素の言行と末期とに感動した結果であるといふ。

ヒンデンブルグ巨像のほまれ (698)

獨逸の連勝時代國民の熱情はヒンデンブルグの木製巨像を立てた、今は之を破壊したさうだ。

A B Cは何の意か (701)

America, Britain, China

隨園の嘆 (703)

「米貴安所窮、年々買如珠」小倉山房集卷五

サイレンの聲 (705)

海中の妖女サイレンの眩惑の歌聲之を聞くものをして恍惚たらしめ舟を危岩に砕けしめ水夫を悉く溺れ死なしむ (ホーマアの「オデッセイ」中にある話) 皆ブルジョアの幻影 (705)

マルクス一派の唯物論者は「神、人道等は皆中産階級の胸中に湧く幻影だ」と曰ふ。著者はこゝにマルクスの經濟、財政、社會、及び政治論に付いては何も曰はぬ、されど彼の唯物論無神論を最も怖るべき戒むべき妄説であると信ずる。

アゼンスの聖 (707)

ソクラテス其哲學を身に實行した人

ペンシイレ…… (707)

「思想と行爲、神と人民」、これがマチイニの標語であつた。「思想と行爲」といふ題名の雜誌を刊行したこともあつた。

其心臓を開き見よ (707)

マチイニ自らの言「わが心臓を開き見よ、イタリヤといふ字がそこにあらう」

碩學 (710)

英國の大化學者サア・オリバー、ロツヂ幽界の人との交通を説く。

文豪 (710)

英國の大小説家ジョージ・エルス世界大戦を題目にした小説を書いている中に曰ふ「在來神學で教へたやうな神は無い、われは有限の神を信ずる」

一切の敬を敬せむ (711)

著者のモットウである、諸宗教の信徒熱心の餘かは知られど「基督退治」とか「佛教亡國」とか互に誹り合ふを著者は最も苦々しく最も痛々しく感ずる者である。

八萬四千鳳毛に非ず (712)

碧巖にいふ『八萬四千鳳毛に非ず、三十三人虎穴を探る』

今わが前に披かるゝ (714)

著者所蔵の紺紙金泥の金剛經はむかし某大藩の後室が逝きし夫君追善のため寫したものと箱書がある。

常不輕の功德 (718)

法華經「常不輕菩薩品」、あらゆる誹謗冷笑を顧みずあらゆる人に作禮して「我れ爾を輕んば爾當に佛と成るべし」と曰ひ従つて常不輕と呼ばれた人が此功德により後ち自らも作佛した。それが即ち釋迦如來の前身である云々。

ホモイウーシオン、ホモウーシオン (720)

中古キリスト教會を分離せしめた爭論、キリストは神と同じ質か、等しき質

か云々即ち所謂「同質論」「等質論」の争。

アメロンゲンにすくまれる (720)

そのむかしキルヘルム大に黃禍説を唱へ、自ら歐洲諸國民聯合してアジアの異教徒征伐に向ふ畫をさへ書いて之を公にした。

願み見れば (723)

八十華嚴の卷七「世界成就品」

正法を誹る極惡人 (724)

同經卷二十七「十廻向品」

歌ふミニオン (726)

ゲエテの「キルヘルム、マイスタア」中にある有名のイタリヤ懷郷歌。

ナトローネン、オランゲン、ミルテ、ロルビイレわざとゲエテの原語をこゝに用ゐた。

サンタ、クローチエ (726)

聖十字院、フロレンスの名利、こゝにイタリヤの諸の偉人の墓がある、ダントの墓はラメンナにあるがこの寺の中に彼の紀念像がある。

オーレリアス (731)

マアカス、アントニナス、オーレリアス羅馬の聖人皇帝(一一二一—一八〇)

「異教並に基督教のいづれの帝王も此君に優る聖徳がない」と迄曰はれた帝王
王ストイク派の哲人——「冥想録」を書いた。

宸濠の亂 (781)

宸濠は明の皇族、賢夫人の諫を聽かずして謀反し、王陽明に平げられた。

青蓮 (782)

李太白別號を青蓮と曰ふ、五十餘篇の「古風」は彼の一代の本領だらう。

西に光蔽ふ (784)

勿論チャイルス氏(英)またグルーメ氏(獨)支那文學史中に李杜の名と一二の詩は引かれてゐる、しかし一般の歐米人は此二大詩人の天才を夢にも知るまい。

カルララの山 (785)

大理石の山、是山より切り出した石でミケランジェロはモーセスの巨像等を作つた。

アテイネイ (786)

パラスアテイネイ即ちミネルバ女神、金甲を着て生れ出でたと傳説さるゝ、生れながらの完成の譬喩になる。

萬神堂 (787)

ローマのパンテオンにラファエルの墓がある。

アークヤンゼル (787)

天使の長

チチアノ、コレジオ、チントレット (787)

皆流芳百代の名匠

ペトラルカ (788)

以下皆イタリヤの大詩人

改增
版補
晚 翠 詩 集 (終)

其不計トスルモノ大體入
ルイニハ成 (一〇二)
書局東京日本橋區本石町三丁目十六番地
電話二六二〇 (一〇二)

不 許 複 製



昭和二年十二月廿一日
昭和二年十二月廿一日
發行 刷

改訂 增補 晚 翠 詩 集

奧付

正 價 金 貳 圓

著 者 土 井 晚 翠

發 行 者 株式會社 博文館

右代表者 取締役社長 大 橋 勇 吉

東京市小石川區戸崎町七十二番地

印 刷 者 荒 井 東 之 助

發 行 所

東京市日本橋區本石町
振替口座東京二四〇番

株式會社 博文館

荒井印刷所印刷

雨江・羽衣・桂月共著

美文
韻文
花紅葉

正價金八拾錢
送料六錢

春花秋葉は天の文、人亦文辭なかるべけんや。鹽井雨江・武島羽衣・大町桂月三氏の文名夙に轟く。其錦心繡腸吐いて美文となり發して韻文となる。才筆爛發紙上珠を聯ね擲たば金石の聲を發せんとす。

大和田建樹著

散文
韻文
雪月花

正價金壹圓
送料六錢

其歌は清楚婉麗趣味掬すべく、其文は優雅流暢、奇想天外より來りて句々風を生じ、言々花を降すものは大和田建樹の筆となす。收むる所彼が傑作二百編、其文味ふべく學ぶべし。

大町桂月著

美文
韻文
黃菊白菊

正價金八拾錢
送料六錢

桂月先生の文は蠻豹をも動かす。悲慨の聲發しては秋風の老松に激するが如く、哀痛の音を吐きては孤猿の幽淵に叫ぶが如く、句々血を吐き字々珠を綴る。麗にして沈痛優にして豪宕、洵に已れ一代の才筆、人の思を清くし情操を純潔ならしむ。

三輪田元道編

眞佐子集

正價金參圓
送料十二錢

編者の母堂故三輪田眞佐子女史は人も知る女學の開拓者、其生涯の奮闘と人間愛は更なり、春秋の恨紫愁紅悉く歌となり詩となる。今刀自が會心の作と思はるゝ和歌と漢詩とを選びて同好の紳士淑女に頒たんとす。

著網信木佐佐 學士 文博

抄袖珍萬葉集

袖珍判函入三六〇頁
寫眞版三葉三色版一葉
正價金壹圓四拾錢
送料六錢

天の海に雲の波たち月の船星の林に漕ぎ隠る見ゆ。
大空を海に、雲の湧き立つのを波濤に、月の動いて行くのを船に、
星の群つて居るのを林にたとへて詠んだものである。壯大な情景
は一種崇嚴な神祕の感をあらしめる。所謂萬葉假名に包まれて居
て近づき難いとされて居た萬葉集を一般の人々に近づき易いやう
平易簡単な評釋を下したのが本書である。

改訂歌集おもひ草
歌集新 月

四六判洋裝美本 正價金八拾五錢
紙數一六〇頁 送料六錢
四六判洋裝美本 正價金八拾五錢
紙數一六〇頁 送料六錢

編浦柏井今

補增

俳諧
例句

新撰歲事記

中判横綴五百六頁
石版口畫六葉挿入
正價金貳圓・送料八錢

どう言ふ時に歲事記は必要であるか。
俳句の題を求めるとき其題が四季何れに屬するか分らぬ時。又其題
が天文に屬するか地理に入るかの疑義ある時。又其名詞が分つて
居ても其意義形狀の解らぬ時。又其題の文字が解つて居ても其音
訓の讀方の解らぬ時。俳句を作る時に題の説明を古今の句を照し
て参考にする時。

大正新俳句

四六判横綴上製 正價金壹圓貳拾錢
紙數四百五十頁 送料六錢

大正新一萬句

四六判横綴上製 正價金壹圓貳拾錢
紙數四百十頁 送料六錢

片岡 茂 著

詩吟教範

三六用洋裝美本
紙數三五〇頁
正價金壹圓
送料四錢

一行の檐滴も一葉の風聲も細かに之を聴けば猶感を催す事あり。若し風清く月明らかなる夜、眞に調節に諧ふ宛轉たる詩吟を聞かんか、何人か千恨萬懷腸九折するの想ひを起さざらんや。詩吟の書冊なきを歎じ専ら性情を涵養し士氣を鼓舞せんが爲に公にせるもの。愛好の士に一本を薦む。

文學博士 佐佐木信綱 著

百人一首講義

正價金六拾五錢
送料四錢

秋の田のかりほの庵のとまを荒み

我が衣手は露にぬれつゝ

作者の略傳、系圖及歌の講義を各歌に付き詳しく述ぶ。百人一首を研究せんとする人々の絶對に手離せぬ良著である。

法學博士 下村海南 著

四番茶

菊半截判
四八〇頁

正價金貳圓
送料十錢

隨筆の如く、漫録の如く、評論の如く、紀行文らしく、歌日記らしく、さりとは史傳にも似かよいたり。一番長たらしい伊豆遊記二十篇の表題四番茶をかりて其儘此書に題す。どんなもの？此書の中味に眼を通して貰ひ度い。

五番茶

菊半截判
四〇〇頁

正價金壹圓八拾錢
送料拾錢

囊の一節。モナコ、カフェーセージ、ミューゼーコンゴ、おもひやり、巴里の三題嘶、(凱旋門、銅像、下水)牛の丸焼き、ガランガランとガタン、華府の或日、パウルスチャーチ物語、丹波市、二月毫、忙しい世と人と歌と駿河路、清水と次郎長、國賓岡本一平、其他。

天地有情

全一冊

菊半裁判二二〇頁
正價金六拾五錢
送料四錢

著 翠 晚 井 土

土井晚翠先生の名を欽慕せざる學生はなく「天地有情」の書名を知らざる青年はあらじ。峨々の山、洋々の水、以て氏の詩を誦すべし。金玉の感吟蒐て四十、凝て一小冊子となる、名付けて「天地有情」。希望、雲の歌、萬有詩人、星落秋風五丈原等總てこれ天才熱血詩人晚翠氏の大傑作。

391
34

終

